

# メルヴィルの晩年詩「ヨタカ」精読 ——運命の悪戯

大 島 由 起 子\*

## 序

今回取り上げたいのは、アメリカの作家ハーマン・メルヴィル (Herman Melville 1819-1891) の晩年の詩作品「ヨタカ」(“The Haglets”)である。詩集『ジョン・マー』(*John Marr and Other Poems*)のなかの3つのセクションのうちのひとつ「海をめぐる作品」(Sea-Pieces)の冒頭を飾る作品である。同詩集の中では「花婿ディック」(“Bridegroom Dick”)に次いで長い。

メルヴィルの晩年についての批評を始めたのはダグラス・ロビラードだが、そのロビラードが「ヨタカ」がメルヴィルの最高の詩作品かもしれぬと激賞している。(Robillard 28) また、ウィリアム・ビッシュ・スタインは、「ヨタカ」はメルヴィルの老年期の意識を最も明示する詩であるとしている。(Stein 411) いずれの指摘についても筆者は同感である。

メルヴィルはこの詩「ヨタカ」の前身ともいえる異なるヴァージョンを、いずれも1885年に長さが少々異なる「白の提督」(“The Admiral of the White”)という同タイトルで、ニューヨークの『デイリー・トリビューン』とボストンの『ヘラルド』で活字にした。いずれも「ヨタカ」より短い。メルヴィルの弟トマスが亡くなったのは1884年なので、この新聞に掲載された作品は、活字

---

\* 福岡大学人文学部教授

になった1884年かそれ以前に書かれたとみなしてよい。このように、「ヨタカ」は、メルヴィルが何度も書き直したこだわりの作品であったといえよう。

スタインは、メルヴィルは悪意に満ちた運命という、積年彼を苦しめてきた問題に立ち返ったのだという。メルヴィルはどうしても運命を論理で説明できなかったが、その過去の認識を払拭したいのだと。(Stein 38)

「白の提督」と「ヨタカ」のいずれもが扱っているのは、18世紀にイギリスのフリゲート艦<sup>提督</sup>アドミラル号（以下、「〈提督〉号」と表記）を襲った海難事件である。〈提督〉号は、おそらく7年戦争でフランスとの海戦で勝ち、戦利品を獲った。おそらく、というのは、作中に固有名詞が出ないからである。〈提督〉号は捕獲した船団の旗艦を務め、先頭を切って故国イギリスへの凱旋帰路に就く。その中には負かしたスペインのガレオン船にイギリス水夫が乗り込んだものもある。イギリスの旗艦は、スペインが中南米で略奪した品を運んでいる。フランスから奪った剣を箱に入れていたが、それをこの船の羅針盤の真下に置いていたために〈提督〉号の羅針が示す方位を狂わせてしまっていたのだ。〈提督〉号は、海戦で受けた損傷も、嵐で受けた損傷も、修繕した。しかし、狂った羅針ゆえに座礁して沈没する。以上が、「白の提督」と「ヨタカ」双方の詩作品の粗筋である。

いずれの作品でもメルヴィルは具体的な事象をきちんと示さないが、「ヨタカ」では、前身の作品「白の提督」以上に、海難事故の委細がわかりにくい。年号や戦争名も出さなければ、肝心のイギリスとかフランスという国名すら出してない。よって時系列を追いながら起こっていることを把握することは、初読では困難を極める。読み進めばわかることもあるが、最後までわからないこともかなり残るのである。

「白の提督」とは違い「ヨタカ」では、作品タイトルともなっている鳥を導入していることが、最大の相違点といえよう。形式的なことではなく大きな主題が鳥によって持ち込まれているからだ。このヨタカという鳥は、〈提督〉号

をずっとぴったりと尾けてくる。「ヨタカ」では事件の象徴が重要になっている。

## タイトル

作品タイトルになっているヨタカという鳥について少々検討しておきたい。  
ヨタカ（学名 Common Nighthawk）は、北極圏を除く北米を中心に分布し、  
<sup>夜鷹</sup>冬は南アメリカに渡る。黒褐色で、細かい模様が全身にある。眉斑があり、喉  
が白い。全長約 22～29cm。くちばしは突き出てはおらず、横に広い。翼は、  
タカのように細長く逞しい。雄には翼に大きな白斑がある。甲高く、キョッ  
キョッキョと、鋭い声で啼く。

宮沢賢治の死後出版された短編小説に「よだかの星」（1834年発表）があり、  
そこではヨタカという鳥の醜さを強調している。たとえば、飛翔中はタカのよ  
うに見えることや、ヨタカの翼や啼き声の強さも書かれている。

メルヴィルの詩のタイトルの haglet は、海カモメ (hacklet)、ミツユビカモ  
メ (kittiwake) とも近いが、メルヴィル作品に描かれている haglet は、海カ  
モメやミツユビカモメよりも、もっと強い鳥である。この点を失念してはなら  
ない。(Madison 79-80) よって、訳するにあたって、「ヨタカ」とした。

ロバート・D・マディソンは作品におけるヨタカの強さのみに注目してい  
る。しかし筆者には、強いような弱いような正体のしれなさがある点が重要だ  
と思われる。脚が大きく違う。タカのような獲物を捕獲するための大きく強靱  
な足は、ヨタカにはない。ヨタカの脚は小さく脆弱とすらいえ、それは外見だ  
けではないようだ。歩くのがぎこちなく、すぐに地面や枝の上にうずくまっ  
たりする。ヨタカは、くちばしが横に広いことや、頭が大きく横長の体型である  
ことともあいまって、スマートな感じはない。この独特の形状を宮澤は醜さ  
として最大限利用したのであろう。メルヴィル作品の描くヨタカは、大きな鳥  
でも美しい鳥でもないが、強い。

## 「ヨタカ」精読

ここからは詩作品「ヨタカ」を精読する。なお、本作品は訳されていないので、筆者の訳による。また、原文には付いていないが、議論していく便宜上、連番号を付す。（および、第三連からは、連を示す数字に、ハイフンで続けて、節を表す通し番号を付しておく。）次が「ヨタカ」の第一連である。

### 1 波が壁を洗いし、剥き出しの教会堂脇

風雨に晒され地衣纏いし壺ありき  
彫刻された石碑あたり  
苔むし、珊瑚張り付きし、  
横臥像ひとつあり、足元に剣、  
頭に飾るは戦勝記念、シーツならぬ海藻巻き。

このように、作品は、海辺の教会堂脇に歌手が見つけた骨壺から始まる。この第1連は第2連とともに、本体ともいうべき部分への導入となっている。

この骨壺は、風雨に晒されて地衣が纏ったもので、いわくありげである。彫刻を施された石碑の近くには戦勝記念像が転がっている。この像は、戦勝記念というかぎりは栄光に満ちているはずなのだが、おそらくは放置されて顧みられていない。本連一行目の fane には、「教会堂」と、「旗」と、二重の意がある。表意は「教会堂」だが、続く第3連で詩の歌手が喚起する旗への伏線となっている。次が作品の第2連である。

### 2 そなたの魂<sup>たま</sup>を我、呼び出さん、無視されし名声、 海水の長き嘆きに洗われし。 われ横臥像に懇願す そちは何の慰霊ぞ——

足元に飾り繋ぎ付の剣、  
戦利品、海草の経帷子とは、これまたいかに。

歌い手は、第1連と同様に、横隊像が何を記念するのかに興味をいだいており、「そなたの魂<sup>たま</sup>を我、呼び出さん」と、頓呼法でこの像の魂を呼び出そうとする。作品全体が、ここで「そなた」と呼びかけられている〈提督〉号の魂への呼びかけである。海水に洗われて嘆かれてきたというのだから、横隊像のモデルは、海難事故で落命したのであろう。英雄的人物が亡くなったとき、当時の人々は嘆き、この像を作ったのだ。読み進むと、この人物とは〈提督〉号の提督であると知れる。

この第2連までが作品の導入部である。このふたつの連と、最終連とで、作品全体の枠組みを作っている。ここまでは各連6行であったが、第3連以降の各連は長い。次が第3連である。

3-1 〈提督〉号は今自由港に錨おろし、  
敵のプレート艦隊を撃沈し  
艦旗を奪いし  
往年の力を物語る戦利品とくつつろげり。  
しかし、わが心に召還せし〈提督〉号は、光のなか漂い、  
小艦隊旗の白地に赤十字はためかす。

3-2 船尾に浪逆<sup>さかま</sup>卷かせ  
船首は種蒔くごとくに飛沫蹴散らす。  
帆に風孕み、桁なるバックル締め  
黒<sup>からだ</sup>き船体は、天の川を去る。  
板震わせ、砲列転がさんばかりに逸<sup>はや</sup>らせて

旗を意気軒昂にはためかせ。

### 3-3 しかしああ、捕虜をとり

盾板付の城を誇り——

スペインを支配するカステリヤの塔、

ナポリとインドを脇に従えるわりには。

驕り高ぶりし、紋付きの塔、

〈提督〉号その大砲おおづつの挨拶や悲し。

この第3連から作品の終盤（第14連の終り）までが、詩の本体ともいうべき部分である。過去にタイムスリップして、〈提督〉号の海難事故を物語っている。静止していたイメージが動き出し、〈提督〉号が勢いよく進む姿が示される。「わが心に召還せし〈提督〉号は」「白地に赤十字はためかす」と、歌い手が〈提督〉号の栄光に満ちた往年の力を物語る勇姿を脳裏に浮かべる。「黒からだき船体」を天の川へと翔けのぼらせるのだから、歌い手の想像の中で〈提督〉号は天翔ける。この船は「板震わせ、砲列転がさんばかりに逸はや」る。

イギリスは、比喩的には「ナポリとインドを脇に従える」「驕り高ぶりし、紋付きの塔」だった。それが本連最終行のように、今となっては「〈提督〉号その大砲おおづつの挨拶」も悲しいのだ。何が悲しいのかについては、まだ謎である。

「驕り高ぶりし」には、歌い手の皮肉が察知される。歌い手は、歌う対象に思い入れはあるようだが、あくまでも距離を置いているようだ。このことを失念してはならない。続く第4連は以下のようなようである。

### 4-1 戦利品たる旗と武器、

あまた数多の地代や戦傷ゆえにいつそう勇まし、

軍艦の凱旋寄港、

伯爵領の栄光を請合う戦利品——

トレドのごとき栄の街から、立派な織物、  
スペインの鉄と絹、ペルーから得し輝かしきもの。

4.2 しかし、激戦で損傷受け、

敗けて勝者の旗掲げさせられ、  
立派な乗り組み乗り組まされて、大砲おおづつにエスコートされ、  
艦隊イはオファーンからたっぷり奪ドいくる——  
〈提督〉号は、前帆孕ませ、  
戦勝の朗報もたらさんとて、先頭切って帰路急ぐ。

4.3 しかし、修道院の薄暗き柱廊から外を、

小夜更けぬうちにかの者が一瞥す。  
かの者、漠王たる天を見やり、  
海原の気配を感ず。  
辛くて顔をそむけるも、いつのまにか受けし傷も、  
追い風送る逆光の翼も、心に留めず。

作品には略奪の主題もある。作品はスペイン、ペルー、メキシコ、インドなどの広がりをもつ。本連の始め6行では、〈提督〉号が相手国から国旗も武器も奪ったことがわかる。国旗を奪うことは、むろん軍事的勝利を収めた徴である。剣がこの後の展開を左右することになるので「ヨタカ」では最重要であるが、むろん略奪品は武器に限らず様々な財宝であることは、続く詩行からも明らかである。

本連で〈提督〉号は損傷を受けるが、この段階では修復すればすむ程度の損傷である。船は順風に恵まれて祖国イギリスに「戦勝の朗報をもたらさんと

て」、誇りに満ちて帰路を急いでいる。

第3節では、作品冒頭の修道院の寂しい場面に戻っている。「かの者」として読者には既知のものであるかのように表わしているが、「追い風送る逆光の翼」の持主だと示されて、ようやく翼の持主、つまり鳥が、指示対象だと分かる。歌い手はこのように、少々サスペンスを持たせる形で詩のタイトルの鳥を導入する。いずれにせよこの段では、「かの者」は逆光ゆえ姿が定かでない。比喩的にはヨタカの狙いが定かでないということである。読み進むにつれ、この鳥の不気味さが読者の胸に迫ってくる。続く第5連は次のようである。

5-1 さて、嘴とがらせた灰色の、ヨタカが三羽飛ぶ、  
どこまでも、ぴったり航跡を追い来る<sup>きた</sup>  
船室の煌きはおずおず消えて、  
鮫は人から輝き奪う、  
光線にそって興奮し  
列をなして戦艦の急ぎの帰還をどこまでも支配する。

5-2 ここに現わるは、その心を誰も知らぬ海鳥、  
近頃では、鎮圧された<sup>フランス船</sup>旗艦を夜更けて尾<sup>つ</sup>けていた、  
(今や勝者で) いつまでも  
ごろごろのたうつ墓の上を旋回し、かん高き声で  
宿命の儀式を行った——そしてひた急いだのだ  
<sup>イギリス船</sup>勝者が黙したまま導くところへ。

5-3 さても強風収まり、艦隊良風受けて、  
漣が銅の舷叩き、  
海原は燐と輝き、



大勝利のあとの煌々たる駐屯地のよう。  
海は、光とシンバルのチリンチリンに合わせ  
征服者を迎えんとて喝采す。

本連で、鳥がようやく本格的に登場する。ヨタカである。ロバート・リーは、このヨタカは運命のようであり、サミュエル・テラー・コールリッジの『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads* 1798) 所収の「老水夫の歌」(“The Rime of the Ancient Mariner”) のアホウドリを想起させると指摘する。そして三という数字は、マクベスの三人の魔女をイメージさせるのでゴシック的だという。(Lee 115) この鳥が、どこまでもぴったりと船を追ってくる。海戦で勝利を取めたこの〈提督〉号ではなく鳥が、「(今や勝者で)」と括弧入りの異例の形で、意味深長に注釈されている。一体なぜ〈提督〉号ではなく鳥が勝者であるのか、勝利の意味合いがわからなくなってきた、読者は足元をすくわれそうな不安感を抱くことになる。

訳にはルビを施したが、イギリスのこの船〈提督〉号が、敵のフランスを「鎮圧」したようである。すぐに飛躍があり、読者にはわかりにくい詩行が続く。というのも、「征服者が黙したまま導くところ」の導く先は、本来ならば征服者に用意されているはずの栄光の座であるはずが、この作品においては、そうではないどころか、どうやら死の世界であるらしい。「ごろごろのたうつ墓」は、現実的には沈没時に重たい巨船がゆっくりと立てるごろごろという音、比喩的にはのたうつような断末魔の喘ぎを示す。

「良き風」や美しくきらめく海が、「征服者を迎え」ようとして「喝采す」。自然界が、祖国イギリスの民に先駆けて、「征服者」たる〈提督〉号を喝采しているのである。とはいえ、次連になったとたん船は嵐に見舞われることとなるので、ここでの好調子はすぐに覆る。続く第6連は以下のようなものである。

6-1 しかしおもねる潮など信じぢゃならぬ、

そよ吹く風にも、油断大敵——。

突風衝いて

帆ならぬシツ張りし塔が迫るゆえ。

災禍集め、後方に生まれしは

激怒した嵐の舳先、消えた虹のような。

6-2 ラッパ鳴り、櫓楼員跳ねる。

そして、非常時の命令飛ぶが、

水夫たち帆桁に

嵐唸るその最中。

しかし、桁端で警戒態勢に着けぬうちにやられる

稲妻光り轟きて、地獄が天を領すとはこのことぞ。

6-3 帆桁、尖塔の高みで傾ぎ

リマでの地震で揺れた十字架なりき。

水夫は蜂みたくくつつきおり

支檣索に、衝撃受け

傾いだ桁の端に突っ伏すは、

海にちょっと浸る瘦せさらばえしコンドルの風切羽のよう。

この連では転回がある。冒頭で歌い手は、「おもねる潮など信じぢゃならぬ、／そよ吹く風にも、油断大敵」と、自然界に惑わされないようにと警告をする。水夫たちは待ち受けているものをまだ知らないが、行く手には嵐ハリケーンが生まれている。「嵐の舳先」と、嵐をも船の比喩で表わしているのが興味深い。

本連終りでは、衝撃が船を襲う。次連になってわかるように、暗礁に乗り上

げて、尖った岩に衝かれたようである。先ほどペルーからの略奪品への言及があったが、歌い手は暗礁に乗り上げた時の衝撃をペルーのリマの大地震と重ねる。そうした南米からの連想を働かせてであろうか、巨鳥コンドルへの連想も示される。乗組員は必死に作業をする。だが、帆桁の端で警戒態勢に着けぬうちに、やられてしまう者も出る。続く第7連は以下のようなものである。

7-1 風ぐ！ものうき炎の舌が<sup>種表</sup>

あらゆるマストと桁を舐め、ほのかに浮かび上がらせる  
登りし皆の相貌を。  
雲のうねり流るる。  
黒き船のし上がり——包囲され——責め苛まれ  
輝く大枝に深々と突かるる。

7-2 心で陸<sup>おか</sup>には背を向けて水夫たちはすぐ、  
震える帆の円柱をさばく。  
浪が激しく船首洗う——  
板砕かれんばかりにやられようとも張り合うが、  
さしもの酒豪どもも陽気な言葉を失いし。

7-3 王家の檣は嵐をば凌ぎきり、  
あっぱれ雄牛の血統証す。  
船首から突き入ろうとも——  
攻撃受くれば、すつくと立ちて、強くなる。  
開けられし穴急ぎ塞ぎ、予備帆も  
大砲<sup>おおづつ</sup>も収め丸屋根なす水に向かいゆく。

稲妻は続いているものの、風が来る。稲光に帆がゆらゆら浮かび、マストに登った水夫たちの相貌が見える。嵐の場面では、時間が前後しているために一瞬わかりにくい。どうやらここでは過去に遡及している。「黒き船の上がり——包囲され」、「輝く大枝に突かる」が、遭難の瞬間である。暗礁の岩の「大枝」に突かれて船はダメージを受けるが、修繕に勤しんで難局を乗り切る。本連では、物語を進める代わりに水夫が行う作業を冗長なほどに細々書き込み、そのうえで水夫を賞賛している。作品の主題のひとつに、水夫たちの立派さと陽気さがある。彼らは、普段はいたって気楽なようだが、危険に際しては諦めることなく勇壮である。なお、こうした営為への称賛はメルヴィル文学での常といえよう。本詩「ヨタカ」は、ある意味、自滅した船についての物語であるが、やられっぱなしではなく、そこには人間の尊厳といってもよい水夫の姿が描き込まれている。船も「あっぱれ雄牛の血統証」す。水夫たちは、「攻撃受くれば」奮闘せねばという心意気で、浪荒れ狂う最中に「丸屋根なす水に」また立ち向かう。疲れきっていても修理にかかり、次連第8連の最終行になると、「主をば侮辱せん<sup>神</sup>とて、〈人〉の営みの気高さをば見せつける」。つまり、水夫たちは、圧倒的な自然界や運命を前にしても、果敢に努力を続ける。神に、人間の営為を誇り、「見せつけ」ようというのだ。そうした営為をメルヴィルは美しいものだと描き続けてきた。続く第8連は以下のようなものである。

8-1 揺らぎつつ疾けし姿の<sup>ほのみ</sup>灰視ゆる、  
弱々しき月は憫で苦しげ。  
追い詰められて、光は褪せて  
朝になれば深海が、溺者の顔見せ、  
旗艦の水夫を、呑む、  
さすれば、人知を越えしヨタカ甲高く叫び、翔び廻る。

8-2 飛び続けていようとも、もう啼いてはおらぬ、

しかし第二の航跡を仰ぎ、  
丈夫な風切り羽をひた使い、  
並び飛び翔けゆくつもり。  
啼きはせず落ちていて、  
遅れをとらず並び飛ばんと、腹を据え。

8-3 煙で羽を整えて、流れに任せ共にゆく、

船は、世界の果てまで宝を求めてピラミッドを満たすも、  
絶好調で疲れて、崩折れる  
船体まっさかさまに轟かせ気絶さす。  
戦利品落とす。しかしまた修理にかかる、  
主をば侮辱せんとて、〈人〉の営みの気高さをば見せつける。

本連は「揺らぎつつ疾けし姿の<sup>ほのみ</sup>灰視ゆる」と始まる。「その姿」とは、例の鳥のことである。嵐にもまれて飛ぶその姿がかすかな月光と稲妻で灰見えるのだから、幽幻である。

嵐が収まって朝になると、受けた被害が白日のもとに晒される。水夫たちの遺骸を海が吞んでいく。船は難破にまでは至っていない。ただし、先の嵐のときと同様に、今回の嵐が与えたダメージは後に効いてくるのだろう。「第二の航跡を仰ぎ」とあるが、この第二の航跡とは、満身創痕状態で続ける、これに続く航海を指す。

一方、鳥たちはというと、「丈夫な風切り羽をひた使い」、いたって丈夫で、船にどこまでも同行しようとして飛び続ける。「煙で羽を整えて」では、鳥は、煙に咽ぶのではなく煙すら利用しているような余裕を感じさせる表現になっている。「人知を越えしヨタカ甲高く叫び、翔び廻る」。このとき鳥は興奮して啼

いているのであろう。

「船は、世界の果てまで宝を求めてピラミッドを満たすも／絶好調で疲れて、崩折れる」とあるが、まさにこれが〈提督〉号の悲劇なのである。大海原の果てまで財宝を求め、勝利して十分に財宝を得たまではよかった。しかし皮肉にもクライマックスでやられてしまう。

本連最終行では、水夫が「主をば侮辱せんとて、〈人〉の営みの気高さをば見せつける」。水夫は神を意識している。本詩では、こうした自然界の機構の奥には、悪意に満ちた神の存在を見てよい。少なくともメルヴィルは、事象の奥に神の存在を見る類の作家である。水夫たちにとって（そしておそらく作家メルヴィルにとっても）、猛威を振るう自然界との闘いは、どこか創造主である神との戦いと重なる。続く第9連は以下のようなものである。

9-1 修理施し立ち直り、武器誇る、

海を航く——反応鋭き磁針が  
いづこを指しているかはわからねど。

針が、動き、揺れ、震えるよ。

操舵手が曇ったガラスを擦り——

覗き込む、しかしおかしな震えを凶とは見ず。

9-2 水夫仲間たちも見逃すも

（彼らの権力への野望は不動）

艦隊の危険が船尾へ伝えらる。

「我らの艦旗を彼らが揚げる、彼らがわれらと運勢をわかちあう。

スペインの偉大なるガレオン船は屈強なり。

わが国の水夫が乗り込み——我らがごとく彼らも難局を乗り切るだらう。」

9-3 今宵は、週末——

しかも日、週、月、年の最後とくる。

四重の終焉迫る、

真夜中近くゆえ。

八点钟打ち鳴らさるる！そは、弔鐘や——

〈去年〉は衰え、海で死ぬ。

作品は、決定的に破局に向けて動き始める。今回も修理は施された。しかし今回は、嵐と修復の反復に留まらず、新たに付け加えられるものがある。新たに付け加えられるものとは、この船の誰も十分な注意を払わない、船の致命的状況——羅針盤の狂い——のことである。操舵手が曇ったガラスを擦るものの、覗き込んでも、相も変わらず震えるだけの羅針なのだ。しかしなぜか操舵手はその危険を提督に伝えてはいないようである。そこには油断がある。

その油断には、今宵は「日、週、月、年の最後」であるというのだから、新年を迎える浮かれムードもあずかっていそうである。この四重の合致は、さいころの目が合致するような偶然に留まらない。「四重の終焉」という表現であってみれば、終焉という象徴的な意味合いが作品に持ち込まれる。真夜中近くに、一日の終りとして鐘が打ち鳴らされる。それが今回は、ただの日課の鐘ではなく、「そは、弔鐘や——」となる。古い年が「ただ終わるのではなく、海で死ぬ」という詩行も意味深長である。厳密には、明けて翌年になってから大惨事に見舞われるからだ。八点钟とは水夫の交代を告げる鐘である。続く第10連は以下のようなようである。

10-1 彼はそれらを上手く、始めた。しかし、〈新年〉は

〈去年〉の抱負を果たせようか。

それとも勝手に推し進めていこうか。

それにつけても、水夫たちは健やかで、ほとんどたじろがぬ。  
あちこちの湾でやられた銃間修繕す  
年配の古参たちが、<sup>ゴシッブ</sup>四方山話をする。

10-2 いい年配組が、少年みたく夢語る。

「いいか、わしらはもう海には出んぞ  
アカプルコの褒美にあずかるのじゃから。  
今宵は皆で夜っぴいて、ドアをがたびしいわそうぞ。  
われらが赤き<sup>この船</sup>鑄塊こそ、わしらに<sup>ほまれ</sup>誉もたらすぞ  
若造ども、人生の黄金期は今晚これから始まるのじゃ！」

10-3 甲板での当直すんでもまだ命令待ち、

嵐に洗礼され、帽子と上着に氷付けて、  
〈レイス・スリーブ〉が  
温まりたくて人懐こく巡回して来る。  
「恋人たちに！妻たちに！」グラス合わせて、  
口にふくめば、髭の囊にワイン付く。

前連での不吉な予兆を想起したい。嵐で満身創痕とはいえ、新年は首尾よく始まる。だが、それはあくまでも表面上のことである。歌い手は不吉にも、「〈<sup>こぞ</sup>去年〉の抱負を果たせようか」と問う。

すぐに水夫の逞しさという主題の反復がある。「それにつけても、水夫たちは健やか」なので、屈託なく修理にかかる。しかも陽気な水夫たちのこと、無駄口を叩きながら作業を賑やかに行う。〈提督〉号では年齢による階層はほぼなさそうである。老若交えて四方山話に花が咲く。年配の水夫が、少年っぽく夢を喋り、自分たちはこの航海でメキシコの「アカプルコの褒美」にあずかっ



たのだから左団扇で一生送れるのだと、上機嫌で冗談めかす。彼は、この航海を最後に引退する旨を述べ、もうお前たちも船には乗るなど、若い者たちにおせっかいを焼く。老水夫は、〈提督〉号を自分たちの<sup>ほまれ</sup>誉だと誇っている。そうやって作業をしながら、すばらしき新年を迎えようと張り切っているのである。続く当直のレイス・スリーブというあだ名の水夫の話からも、彼らがまじめに与えられた仕事はしているが、新年を迎えるとあって浮かれていることが確認できる。続く第11連では、提督もまた危機意識を持っていない様子が描かれている。

11-1 「おう、星明りなんかなくてへっちゃらよ、  
だから船の炉の光の記憶がここに飛んでくる、  
だからこのワインの光の陽気さが生まれる、  
誉ある仲間よ一丸となって——  
名誉か！われらが提督様の目的がそれを予告していた。  
『墓かトロフィーか』ってわけで、お陰でほら、<sup>トロフィー きん</sup>栄光と金の方だ！」

11-2 しかし、かのお方は、お高い地位ゆえ、おひとりで、  
孤高を保たねばならぬ、  
部屋扉には見張立つ  
丸天井の〈運命〉の像みたく黙して。  
かのお方、<sup>ねぶ</sup>眠たい灯りの中でまどろんでおられ  
しかも、ベルトも帽子もそのまま——〈白の提督〉殿は。

11-3 まどろみなさる、警戒<sup>よわい</sup>続きで齢を重ね——  
幾年月、あちらこちらと遍歴重ねし。  
まどろみて、船の動きも

下で金塊が立てる微音も、心に留めず、  
剣の磁気の〈真反対の〉意図が、頭上の磁針を  
狂わせているなど、気にせずに。

「墓かトロフィーか」、つまり死か栄光か選べというなら、水夫たちはむろん栄光を選ぶ。〈提督〉号は首尾よく名誉も富も得た。そもそも、そういう展開は、提督が目的を高く設定したからであった。

本連では、老提督のまどろみを描いたうえで、幾年月を経て警戒続きで油断もせずに活躍を続けてきた提督の越し方を紹介している。彼は海での経歴において、そろそろ決定的な業績をあげたい時期でもあったところ、幸いにも今回の航海は大成功だったのだ。先の連でもそうであったが、メルヴィルは一般水夫の賑やかな連帯と、立派な遍歴を重ねてきた提督の孤高ぶりを対比させている。水夫たちの連帯を温かく描く以上は、彼らを生還させなかった最高責任者である提督の責任を問うことになるのは一見すると必至だと思われるが、メルヴィルはそうはしないで、むしろ赦しの主題を導入しているようなのである。そもそも、第9連第2節にあったように、野望は何も提督に限ったことではない。括弧入りの形で示されているとはいえ、水夫仲間たちの「権力への野望は不動」なのだから。これについては解釈が分かれるところだろうが、筆者には、作品の歌い手は、提督の不注意を糾弾するのではなく赦しているように思える。勇み足になってしまったが、それは本作品の最終連との関連からである。続く第12連は以下のようなようである。

12-1 影を落としし三つのものを、さして気に留めず  
狙いを定めたごとく航跡を急ぎ尾<sup>2</sup>けて、尾けてくるもの  
疲れ知らずの翼と瞼なき目をしたものを——  
船に並びどこまでも尾けて来る。

いつまでもため息ついたり歌ったり  
狙いを定めたごとくにぴったりと。

- 12-2 提督殿まどろみて遂に浅き夢見し、  
夢で大勝利の報酬を得る。  
〈青の旗〉と〈赤の旗〉が、  
国を代表して挨拶せんとして海に浸たる  
誇り高き港で白地に赤十字の提督の旗——  
なのになぜひるまねばならぬ。なぜ舷のペンキ晒さねばならぬ。

- 12-3 海は、腹が空いたと船を狩る、  
ヨタカに鮫たち付きまとう。  
申し合わせたごとくに、風浪も  
鱭あるものたちが翼あるものたちと共に狩る、  
索具で鳴りし風琴が  
無敵艦隊の沈没を偲び泣く。

提督がまどろみ、遂に勝利の報酬を得る浅き夢を見るというのは、この提督にしてみれば、これまでの苦労の年月に対して、今回の航海でようやく勝利の報酬を得ることができるという目算である。だが、その後の展開に鑑みれば、それは所詮「浅き夢」にすぎない。

読者にとっては、いつの間にかという違和感が拭えないが、この戦艦が横倒しになって船脇を晒している描写になる。すると、転覆の理由として、驚くべき詩行が飛び出す。——「海は、腹が空いたと船を狩る」からだというのだ。海が何らかの悪意をもって嵐を起こしている、そういった、海の、まるで食欲のような欲望を前提としているのである。これはもう食人の海とすら形容でき

そうである。

例の不気味なヨタカで本連は始まっているが、ヨタカは狙いを定めたように、航跡を急いで尾<sup>2</sup>けてくるのであるから、悪意を感じさせる。鳥だけではない。ヨタカに付きまとう鮫もいる。鮫の狙いは餌としての人間であろう。作品には食物連鎖の主題もあるが、水夫（人間）も、陸上でのように食物連鎖の上位にいるのではなく、ここでは下位にいて、鮫にとっての餌にすぎない。自然界は、名誉のために闘う男たちの営みなど意に介さず、鮫に風浪までが加わり両者が結託したかのように「海は、腹が空いたと船を狩る」のである。「世界の果てまで財宝求める」船の戦利品というのには、帝国の暴力と、「(今や勝者)」たる鳥、それと人間を狙う鮫と海（風浪）における食物連鎖とが重なるのである。鮫といえは、第5連で、「鮫は人から輝き奪う、／光線にそって興奮し／列なして戦艦の急ぎの帰還をどこまでも支配する」と、あの段階では不可解かつ目立たないながらも、すでに支配的存在として登場していた。

そうすると、「やるせなき風琴」が偲び泣く。むろん、この風琴への言及は、同じく『ジョン・マー』所収で「ヨタカ」の次に配された、「風琴」（“The Aeolian Harp”）という詩作品を意識させる。「ヨタカ」の、続く第13連は以下のようなものである。

13-1 ああ——<sup>かなた</sup>彼方の！あれは<sup>オーロラ</sup>〈北極光〉か。

面舵とれ、の閃光信号か。

そうとも、信号が遮断機から刺すように下り来る。

だが警告に続くは、いきなりの壊滅。

避けんとて面舵一杯とるも、

激突！船にも心臓にも衝撃だ。

13-2 しかし、心臓に激震走ろうとも、太鼓が、

水夫たちを持ち場に急かす。  
規律、抑制、規則——  
英雄的なるものは義務を知る人を作る、  
水夫は運命が割り当てし  
持ち場で踏ん張る。

13-3 しかし、わけもわからず弄されて——

水なる経帷子の向うを知らんとて眼を凝らす。  
「俺たちや、<sup>おか</sup>陸からこことらにねじ込まれた。どう騙されたんだ？  
海流に乗れず——こんなところに誘いこまれようとは？」  
誰も、音を立てる剣を心に留めぬ  
ランプの灯浴びし磁石の箱を。

これは、作品全体では、起承転結の転に当る連である。船は面舵一杯切るが、間にあわない。今回の衝突は沈没に繋がる決定的なものである。本連の数が西洋での不吉な数 13 になるようにしてあるのも、計算づくのことであろう。

特筆すべきは、自然界の猛威を前に再び人間の尊厳が実に肯定的に謳われていることである。すなわち、「英雄的なるものは義務を知る人を作る、／水夫は運命が割り当てし／持ち場で踏ん張る」。このように、こうした情況でもひるむことなく義務に徹する水夫を「英雄的」だと表わしている。

水夫は、激震が走ろうとも怯えたりはしない。ただ、船が沈没し自分達が死ななくてはならない、その理由を知りたいだけだ。衝角が急所を突くが、衝角といっても鋼鉄装備した装甲艦戦艦のそれではなく暗礁であるから、この船は戦艦として戦でやられるのではない無念の沈没である。続く第 14 連は以下のようなようである。

- 14-1 ああ、何なら生き残れ、誰なら泳ぎきれよう、  
どの短艇の水夫なら、禁断の岸まで泳ぎ抜き、  
綱索を測れよう？勝利を取めたというのに沈み——  
敗者みたく滅ぼされねばならぬとは？  
皆が呻きを押し殺し、  
鈴なりに立つも、心はとりどり。
- 14-2 天が喚起する。だが暗礁は  
祈りも絶望も、嘲笑うだけ  
その先が割れていようがあるまいが、支橋索で踊らされ、  
潮に弄され狂わされ蒼白くなりし仲間たち。  
方や、丈夫で、目的を達せんと、  
ヨタカ翔び交う、もう船尾にはいぬ。
- 14-3 ヨタカ、織機シヤトルの杼よろしく翔び交う  
頭上の、いたんだ策具の中をせっせと——  
行きつ、戻りつ——一織り、また一織り、  
けたたましくもうひと翔びしたかと思うと、一気にきゅっと織りあ  
げる  
ののうち、断末魔の喘ぎをあげる、  
難破船たちを中にかかえる無辺の海原、その上で。

勝利を取めたというのに水死せねばならぬ、しかも敗者に滅ぼされねばならぬという展開が、まさに、この作品の悲劇でありドラマである。予想できる海戦での沈没ではないからだ。フランスには勝ったのに、負けたフランスから奪って、置いていた剣が、このイギリス戦艦〈提督〉号の羅針盤を狂わせたか

らである。あたかもフランスの復讐欲が成就したかのよう。

〈提督〉号の沈没場面そのものを、メルヴィルは描かないで、控えめな表現に留めている。先の連とこの連の間で、〈提督〉号は沈没しているはずで、第12連では、いつの間にかという感じが拭えないが、この戦艦が横倒しになって船脇を晒している。作品は、まるで一般論のように、「のたうち、断末魔の喘ぎをあげる、／難破船たちを中にかかえる無辺の海原、その上で」と表すに留めている。沈没場面そのものを書く代わりに、第5連のフランス軍艦の地獄めく沈没場面を前もって示しておいたことで、読者にその状況の悲惨さを想像させるようにしている。

水夫たちに関しては、本連始めの「何なら生き残れ、誰なら泳ぎきれよう、／どの短艇の水夫なら、禁断の岸まで泳ぎ抜」けようは、修辞疑問である。生き残れるものなどいないことは明白である。水夫たちが呻きを押し殺して鈴なりになって立ちつくしている姿は、痛切である。羅針盤の狂いを知らないの、提督を含め乗船している者は、なぜ自分たちが死ななくてはならないのか、皆目、理解できない。先の第13連でも同様で、水夫たちは、一体何が起こったのかと茫然としていた。——「わけもわからず弄されて——／水なる経帷子の向うを知らんとて眼を凝らす。」そして「俺たちや、<sup>おか</sup>陸からこことらにねじ込まれた。どう騙されたんだ？」なのであった。水夫たちは、難局にも奮闘し最後まで船を立て直そうと必死ながら、遂に力尽き、息絶えゆく。

すると、運命を紡ぐ三美神よろしい三羽のヨタカ（Stein 43-44, 46, Cohen 215）が死の舞踏を踊る。その様子の不気味さがそくそくと読者の胸に迫る。暗礁が船に止めを刺すと、ヨタカがこの時を待っていたとばかりに興奮する。ヨタカはこの瞬間の興奮が味わいたくて執拗に尾けて来たのだと思わせ、鬼気迫るものがある。

ここまでが、〈提督〉号の顛末である。続く第15連が作品最終連である。この連は、形からしてもいかにも別格扱いになっている。下の第15連のあとに

付した線\_\_\_\_\_と、そのあとの一行空けは、原文のままである。

- 15-1 ああ、プレート・フリート号のために今や、  
かの船の勝利の徴しるしとして奪いし旗と武器。  
古き〈修道院〉の壁には掛けられることなし  
聖なる掌で〈時〉の砂塵を掬え。  
溶けそうな夜、満足せぬでもなく、  
〈時〉の砂塵を得し者が眠る——〈白の提督〉号が。
- 

- 15-2 水底深く貝殻と埋まり  
そして深みにて漂う宝と、  
永遠とわにより深く  
はかりしれず、眠る——  
大砲おおづつ、あたりに投げ出し、  
水夫たち、足元に従え、  
魔法使いの海がかれらを魔法にかける  
けっしてヨタカが羽はばたけぬ処ところで。

- 15-3 流星ながれぼしたち戯れし夜  
そして波間に光舞いし夜、  
山の精オレイアスが穴から  
銀の色したシラスウサギたちとお出ます。  
海原の潮から立ち昇り、



かなた天より降り来たる、  
夢のなかで溶けあう光線たち  
深き海と星と。

〈提督〉号の沈没とヨタカの狂喜の乱舞を描いた前連とは対照的に、この最終連には静謐が漂う。静かに作品の枠組みである海辺の修道院に戻っており、作品全体が円環を成す。

〈提督〉号の悲惨さは短く表わすに留められている。沈没時の水夫の最期を描くにあたっては、先の第14連で、皆が「鈴なりに立つも、心はとりどり」とあっただけである。水夫たちの魂は各自の人生に戻っているようであった。メルヴィルは、失われる個々人の貴重な人生を、各自の個性ある「孤」として描くことを忘れてはいない。当然のこととはいえ、水夫各々に個々の人生があったにもかかわらず、それが失われる。「心はとりどり」という表現に留めていることで逆に、尊い人命の犠牲を静かに強調しているとも解せよう。

本連で〈提督〉号は、水夫ごと、宝と共に海底に存している。本詩第3連に、〈提督〉号が今や「自由港」にあると述べてあったが、本連に達すると、海底のことを言っていたのだとわかる。「自由」というのは、ある意味皮肉である。難破船は、入港許可などなくても、つまりは自由（free）に、海底に投錨できるというわけである。また、海底はヨタカが来ないところなので、そこでは不気味なヨタカから免れている（free）という意味でもある。

この最終部については、解釈が分かれるところであろう。〈提督〉号が、いわゆる海の藻屑となったのかどうかである。リーは、メルヴィルの「記憶の弁証法」において本作品は胸を刺すように辛辣だという。（Lee 117）一方、道永周三は、本詩の終わり方について、肯定的な意味を読みこみ、次のように述べている。筆者は道永のように読みたい。

ここには幻想的な美の世界がある。流れ星が現れる夜はきまって、奈落と星が天上界と下界が、不安を築く如くまた和解を計る如く、夢のように混じりあうと語り手は述べる。語り手は自然界への呪詛を伝えたりはしない。むしろ自然は人間以上に優位さを保って、ある点死者の不幸を悼みつつも、それ自身有意志の存在として戯れごとにも機能する。その意志はそれ故本質的にも人間界の事象と独立して働くのであり、人間はその意味において自然に頼ることもできず、逆に頼られることもできない。両者はそれぞれ別の道を歩んでいると作者は推定しているのである。がともかくも、作者が語り手に託したロマンチックな自然観は輝きを放っている。(道永 114)

先述のように「腹がすいたと船を狩る」ような残虐な自然界にやられ、水夫たちを乗せたままで、船はハンターたる自然界の腹の中に納まった形である。しかし逆説的ながら、そこは、もう狩られ食べられる心配のない、妙に自由な領域でもあるのだ。道永は、この状態を「人間に与えられた一種の至福の境地」(114)とまで評価している。筆者は、上記の長い引用部最後に記されている、本詩のロマンチックな自然観に対しては、それだけでないナチュラルスティックなグロテスクさも感じるが、概ね道永に賛成である。

作品全体では、軍旗の原色や財宝の煌めきなど、色が横溢していたが、作品の最終部は、一転してモノクロの世界である。そして、モノクロとはいえ、そこには光沢があり妙に明るい。神妙の領域といってもよいであろうか。海面が銀色に光っているだけではない。おでます山の精も「銀色のシラスウサギ」と一緒なのだから、これもまた銀色である。

本最終連で〈提督〉号は、水夫と宝と共に海底に存している。この最後については、いくつもの疑問が湧いてくるが、答えは作品には明示されてはいない。この作品で描かれた人間のドラマも突き放しているとするべきであろう。

第1節では、提督が「〈時〉の砂塵を得し者」であるとしている。何の比喩だろうか。また、「聖なる掌で〈時〉の砂塵を掬え」は何を意味するのか。本連での修道院は作品冒頭に描かれていた修道院のことと考えてよいだろうが、では「聖なる掌」は、修道僧の手のことか、超絶的なものの手のことか、それとも物事を受容する術<sup>すべ</sup>を知った者すべての手のことであろうか。

同じく第1節にある「満足せぬでもなく」という表現で思い出すべきは、「ヨタカ」を取めた詩集『ジョン・マー』に付された散文の序文である。そのエピソードに、メルヴィルは、「健康と満足と」と掲げていた。この時期のメルヴィルは、「満足せぬでもなく」、甘んじて人生に折り合いをつけていたのだろうか。

「ヨタカ」の最終部では、詩の始めに歌い手が呼び出した魂が、戯れている。提督を含めて水夫たちの魂が死んで彼岸に行ったのだ。超越して自由になったのだ。三羽の鳥、そして鳥が体現する宿命が行き着くところまで行き、船は難破し、最悪の事態となってしまった今、水夫たちの魂は共に、ヨタカも来れぬような処<sup>ところ</sup>にいる。逆説的ながら、そこは、清清しさすら漂う別領域、魔法の世界である。水夫たちは、ヨタカが象徴する宿命が領する現世から、ようやく解き放たれたのだ。

船は、「魔法使いの海が彼らを魔法にかける」水底に沈んだままである。これは「流星<sup>ながれぼし</sup>たち戯れし夜」であり、「光舞いし夜」である。自由の境地、戯れ踊る、賑やかで明るい世界ですらあるようだ。「山の精が穴から」出てきて「銀色したシラスウサギとお出ま」すから、海でありながらも妙に山との一体感のようなものすらある。海でありながら山といえ、続く最終部と連関する。「穴」という語からは土すら感じさせる。つまり、示されているのは、森羅万象を丸ごと取り込んだアニミズムの世界である。この終結部は、修道院や教会堂といったユダヤ・キリスト教を枠組みに使いながらも、奥には異教世界を持つ。どこか民話的、童話的といってよいような、ほのぼのとした感じが漂っている。月明かりに誘われるように、陸地では山の精と兎が出てくる。「山の精」

エルフは、ゲルマン神話に起源を持つ、北ヨーロッパの民間伝承に登場する種族である。イギリスの船、その船が沈めたフランス船、そして帝國的に他の国や地名は出てきた。だが、ドイツはここまで本作品には出ていなかったにもかかわらず、最後にこうした形で出てくる。ここでゲルマンにずらす理由としては、アングロサクソンから離れた前近代的なものの導入といえようか。ドイツは1871年に統一されたので、ヨーロッパではイタリアと並んで近代国家への統一が遅かった国である。そのことも、ここでドイツ的なものが用いられている理由かもしれない。エルフは、語源としては「白い」を意味するというから、この箇所の銀色の世界にふさわしい。

## 結論

本詩にそこはかとなく漂う余裕の気配は、描かれているのが、必ずしも隔絶した世界でない描出方法にもあずかっているだろう。山の精は、山のニンフのことで、普通は旅人を助ける。それがシラスウサギとお出ますのだから、仲間のいる世界なのだ。いずれにせよその世界は、ヨタカが佳境に入ってけたたましく飛び交った、かの悪意ある残虐な世界とは対照をなす。

翻れば、余裕が、メルヴィルの晩年を特徴付けるといえよう。このような、一見過酷きわまりない作品ですら、ほのほのとさせるトーンを帯びている。それが『ジョン・マー』の世界でもある。たとえば、この詩集所収の、死にかけている老水夫の独白である、散文と韻文の混交作品「トム・デッドライト」(“Tom Deadlight”)にしても、どこか語り口がユーモラスである。死出の旅を、本人が冗談めかしている。そして、「ヨタカ」でひとつの重要な主題であった水夫の友愛となると、これまた『ジョン・マー』所収の「花婿ディック」の世界でもある。「ヨタカ」最終部に、死を恐れていないメルヴィルを読み取ることはできるだろうか。筆者は、そうしたい気になる。

「ヨタカ」における鳥ヨタカの意図は、あくまでも不明である。おそらくヨ

タカは宿命の象徴といったものに留まるであろう。第5連第2節には「その心を誰も知らぬ海鳥」とある。とりあえずは宿命を表わす鳥だと見てよいであろうが、その本性については作品最後になっても謎のまま残るのである。

蛇足になるが、基本的には、メルヴィルにとって鳥は推し量りがたいものと映っていたようである。同じく『ジョン・マー』所収の作品に詩「グンカンドリ」（“The Man-of-War Hawk”）がある。短詩なので、ここに全訳を示す。（本邦初訳であるので、拙訳）

かの光抱けし雲を上げば 黒き船の白き第三支樯帆その上を  
黒き軍艦鳥の旋回す  
かの飛翔、低みに生きし我らに叶おうや。

鳥の領するあたりの静けさに、  
人の矢も思考も、及ぶべくもなし。

本稿の始めで、宮沢賢治の「よだかの星」に言及し、宮沢がヨタカの翼や啼き声の強さも書いていることを指摘した。繰り返せば、メルヴィルの詩のタイトルの haglet は、海カモメやミツユビカモメと訳したのでは、作品の鳥が帯びる不気味な強さを減じてしまうであろう。スマートではなく醜いとも見える、しかし翼といい声といい強い鳥、そうした特徴をメルヴィルも利用したのだ。ヨタカの意外性が生む不気味さを、いわくいいがたい宿命を表わすのに最大限利用したのであろう。

## 引用文献

Cohen, Hennig. “Comments on the Poems.” Herman Melville. *Selected Poems of Herman Melville*. Fordham UP, 1991, pp. 175-259.

- Furui, Yosiaki. *Modernizing Solitude: The Networked Individual in Nineteenth-Century American Literature*. U of Alabama P, 2019.
- Lee, A. Robert. "A Picture Stamped in Memory's Mint: *John Marr and Other Sailors*." edited by Sanford E. Marovitz, *Melville as Poet: The Art of "Pulsed Life,"* pp. 104-24.
- Madison, Robert D. "Melville's Haglets." *Leviathan*, vol. 5, no. 2, 2003. pp. 79-83.
- Melville, Herman. *Published Poems: Battle-Pieces, John Marr, Timoleon*. edited by Robert C. Ryan, et. al, *The Writings of Herman Melville*. vol. 11, Northwestern UP and the Newberry Library, 2009.
- Robillard, Douglass. "Melville's Late Poetry: Sources and Speculations." *Essays in Arts and Sciences*, no. 27, Oct. 1998, pp. 23-35.
- Stein, William Bysshe. *The Poetry of Melville's Late Years: Time, History, Myth, and Religion*. State U of New York P, 1970.
- 道永周三 『ハーマン・メルヴィルの詩——メルヴィルの詩に関する入門書』、大阪教育図書、2012年。